

骨

あたり

ム

ン  
ス  
ィ

〇  
六

# 目次

巻頭骨

暁方 ミセイ  
葦林

04

寄稿

甘楽 順治  
四面譚

07

小川 三郎  
達磨

14

海埜 今日子  
すいし、君へ。

17

小笠原 鳥類  
ムクドリ科などの鳥、いくつかの種類について

19

山田 亮太 カニエ：ナハ 橘上  
TPI Record 001

23

連載

河野 聡子  
ブルーブック

34

小田原 のどか  
むりえわ

35

ダンサーズっ

兼柳 綾  
証明AとB

37

疋田 龍乃介  
星のぼほろかるよ

39

朱位 昌併  
みごもは欠片好みか

42

金山 大地  
(続二)失題、即ち闘争マンイン漂流記

45

金子 鉄夫  
ヒヤクニン

50

鈴木 一平  
アフタートーク

52

短歌

新上 達也  
扇風機影

55

ホネカイブっ

金子 鉄夫  
加藤健次のたかだか二冊の詩集を読んでの覚書

57

編集後記

61

卷

かんとう

頭

こつ

骨



## 葦林

暁方 ミセイ

骨を、枯れ葦の林に埋めてきた。

笑った声や、振り返った、そのとき頬を青くなにかの光がぼつと照らした、……あれは晩くまでやっている、淋しい町のコンビニエンス・ストアの照明灯だったか、あるいは灯台の光が、どういう具合かここにまで届いたのか、……その発光を、いつかわたしは、激しく思い返すことがあるだろうと思つた。

(いままだ遠くでちらちら光っているあれは、懐かしいあたたかな部屋だけが、そつと夜に映し出されている。

湿った秋のあまく苦い雨、撫でるように 冷えた外套だけが濡れそぼっている……。)

鳩の骨を、枯れ葦の林に埋めてきた。

煮凝った…

寒さがくる野が、枯れて、

遠く黄まじりに、平たく倒れている。

(わたしはその沈んだ色あいを、すこしでもあかるくしようと、白い息を吐きかけていた、)

糸杉…硬い枝と薄曇りの陽が、空で、わんわん反響していた。

それを路傍で、焼きつけながら

霜柱を齧る犬を見ていた。

(ああいつか、

あんなふうな、あんなふうな)

一瞬、目蓋の奥で白く痛めて  
あなたが振り返る瞬間かすかに頬が発光していた、その印象は  
輪郭線が消えかかりながら  
幾度もトレースを続けられ  
いまや夥しい数のみどりの夜光船が  
燐を燃やし  
眸のなかへ進んでいく。

冬の朝、死んでいた  
鳩の骨を、枯れ葦の林に埋めてきた。

どこかで  
薄く延びている霧  
沼のむこうがわで  
警報機が鳴っている  
気がする。

# 寄稿



## 四面譚

甘樂順治

〇、

かこまれたが

ひるまず

アームストロング砲をぶちこんでやった

廿一世紀もずいぶん過ぎたのに

わたしたちは

まだたかっている

東西南北に

ひとりずつ

口をとがらせた子どもが配置された

底辺には

予算にあかるい係長も加配しておこう

なに

わかりやしない

今世紀はひきつづき

初等数学のような戦争にあけられている

ひるまず

敵国の捕虜の口蓋に

かけがえのない

タロ芋をねじりこんでやった

(いきしちに)

それはつまり

民族の悲鳴

そう聞こえたらうれしいが

一、

明治三十八年、わたしたちはふたたび囲まれた。

神田錦町の中華料理屋でのこと。つめたいものに醤油をつけて、どうしてこんなにもつめたいのか。憤りながら、明け方まで頬張り、かつ飲み込んだ。

今は省のことなぞ言うべきでない。章先生は演説していた。貴君らもわたしたちも囲まれている。等分されようとしている。まるで砂浜の西瓜のようではないか。

そういえば先月茅ヶ崎に行った。よいところであった。宿の娘は片方の耳がきこえなかった。わたしたちの右側での会話は彼女にわからない。すこぶる快適。わたしたちは毎晩少しだけ酒を飲み、省についてつめたく語り合った。明治三十八年。他に記すべき出来事もない。何回目かの万歳をした。

囲まれているきもちよさについて。

わたしたちは死んで醤油につけられているようなものだ。

(むろん飲食する側からみれば、の話だが)

ところで

湖南に残してきた弟はどうしているだろう。

きみは知らないか。

二、

キャベツと頭蓋

はにているか

三浦半島のはしをバスにゆられながら

議論した

わたしの葉は

きみよりいくぶんか少ない

だから

きみには腹が立つ

根拠はないが今すぐここでおりてください

(話があるならおもてできこう)

キャベツに恐喝されて

ぞろぞろと

ひとびとはバスからおりた

あたりはどこも白骨

だれもそのようにとり囲まれたことはなく

みんなあわてた

こわもてだが

胃腸にはいいんだよ

軍隊がからだの中に入ってこようというのに

ばかだな

まだ

西洋の野菜のことをかばっている

バスの

うしろ姿を見送りながら

(そういえば)

わかい頃

おんなじことがあつたと

となりの老人がしつこくいうのだが

それはひとでも

キャベツでもない

神奈川県七時のニュースの声であつた

三、

ふかいことはかんがえない

感動はふかくなつてからでは手遅れである

外山正一氏は

あたらしいひとであつた

進めや進めもろともに

抜刀隊の詩はこのたび

わが国の軍歌となすことに定め

教導団軍楽隊の教師仏人ルルー氏が

楽手八十名に唄わしむ

玉ちる劍

抜き連れて

死する覚悟で進むべし

外山正一氏は

もちろんそれ以上のことはかんがえない

これがつまり新体の詩である

隣家の

みかんの木のむこうから先は古く

こちらは

それよりずっとあたらしい

と、外山正一氏は

余裕である

おれは豆入りの大福がだいきらいだ

ふるいとおもう

天地容れざる朝敵ぞ

これはすなわち

午前六時くらいにやってくる敵のことである

行替えなんてどうでもよろしい

新体の詩では

かたちは大事だがたいして意味はない

(やあ、おはよう)

みごとにふくらんだおでこだ

傷はふかくなつてからでは手遅れである

(必ずしもそうではないが)

とりあえず

冷やしておきなさい

盥の水は

指ではかり

いくぶんすくなめにするのがよい

もろくてぐにやぐにやの新体とはいえきみのからだだ

大事にしなさい

外山正一氏は

(突然死して)

むこう向きにいいはなつた

四。

湖南の弟は、省の役人に捕われ、

二十日に及ぶ留置のあと病死した、と手紙にあった。

この手紙を代筆してもらうのに

母は二か月かかった。

ニュースだろうか。

わたしは三浦半島を南下し、

予報の声としてひろがった。

朝敵がきましたよ。

みなさん、起きて血圧をはかりましょう。

抜刀隊の唄、うたえる人いますか。

（母から送ってもらった布靴は、

東京ではとうとう使いませんでした。

ここは雨が多くて、すぐに足の裏が濡れてしまう。

歩くのにひどく不愉快なのです。）

諸君、

わたしたちはまだ

おのおのの戦争に右往左往しているだけである。

世間はそう言って憚らない。

だれとだれが争っているかなんてみんな知らない。

それでよいのです。

母もがんばっています。

お隣の外山さんは飲んで今日も帰ってきません。

それでよいのです。

## 達磨

小川 三郎

達磨が山と積まれている。  
そこからひとつを拾い上げて  
目を書き入れて立たせると  
勤め人のようなつらになった。

なんだか正月から  
親切心を無駄にされたようで  
面白くない。

面白くないので  
息子のように大事に抱え  
お祭りだらけの町を歩くと  
達磨ときたら、達磨のくせして  
みるみる不安な顔になった。

神様が  
どこにもいないなんて  
そんなつもり  
なかったようで。

家内安全なんて  
所詮ここだけの話だよ。  
私は流し目に西を見てから  
達磨を抱いて走りだした。

正月だからめでたい笑顔で  
追いつがつてくるひともあり  
達磨もなにぶん初めてなことで  
目を閉じようと模索はするが

達磨だから閉じられない。  
むしろ

こじ開けられていく。

私は速度を増して走る。

もはや達磨の手足となつて

華やぐ町を駆け抜ける。

正月のことで愛想もいいから

みんなどんどん

集まってくる。

への字の口から悲鳴をあげて。

ごらん、世界はうつくしい。

せめて色が多かつたなら

青とか黄とか紫とか

入り混じつて拡散すれば

福も来たかもしれないが

紅白だけなら独善的だ。

希望は叶わぬことばかりだ。

誰かの指が触れた瞬間

達磨は達磨のふりをやめた。

元の棒切れに戻ってしまった。

私はそれを振り回し

追いつがる人の頭を叩いてまわる。

正月の血は生(き)の味がする。

覚えてないかもしれないけれど

去年も同じことがあつたよ。

肩を抱いて慰めながら

まぶたをきれいに拭き取つてやると

そこには達磨が山と積まれて  
眉間に皺を寄せながら  
罪などなかった顔をしている。

ああ

今年もぼくたち

仲良くやっていけるんだねえ。

## すいし、君へ。

海埜 今日子

すつとみずをくずしてみる。このへんだつたら、くろずんで、ぎこちないねえ、うでのあいだで、きつとつまずき、みらいけいよりもつと、なかがよくて、てーるらんぶ、わたしをはもんにつけるのだらう。あめのいろあいをふかめていった、あのへんだつたら、まとわりついて、ひきずるように、にじゅうよじかん、みおをうねり、もぐつてゆくのをみたのだけ。ちいさなかわら、にどとであうことのない、よるのきしみ、あなたのすいぶんはどこでしたか。

いつてきだつたら、とどくように

こいびとたちが、みずにいること

くださいね、もうすぐ

とぎすませ、たゆたうのだから

かがみをこぼつ

ように、しせん、けど、やさしい

ぶんさんのたくさん

あるいは あまぐもだつたらやりきれない

ひたいをかたに、どんなにか

けはいがとでもながれをうぼっている

わたしたちを、わかつこと。そうではなくて、わかたれたままにかえずという、そんなぜんいをみずにひたした。いとをひくかもしれない、はなれられなくなるかも。べただねえ、よみちにたまには、かわもをかんじた。あちらがわだつてね、よびかけだつたかが、およぐからさ。あのへんまでは、そらをうつし、きぎをうかべさえし、なか、よかつたのかしら、じゅうにじかん、うかんではきえ、すいぶんめがけて、ちいさなかわら、ゆるむように、いしすらみおくる。

いつてらつしやい、すいこむの

こいびとたち、とどくように

みず、かがみにね

りようぎしで

どんなにだましたかつたのか

まちがうつりこみ、あおぎめて

よどむようにそらが、ああ、ください

ながれのことばがよかぜをたわめる

できることなら、いわぬがみずだよ

ぞつとする、みずをひたしたら、そんなにもくずすのだ。あめのゆくえが、みなもをぎづかっていた。わたしをそんなにも、みわくだつたの、うつりこんで、たぶらかして。だつて、そこにはいないのだと、いたくないねえ、にじゅうよじかん、ほうきぼしのようなかわ、のさきで、すいぶんたちが、はなれ、ときめくように、ほとぼしったり、なんてぎ。りようぎしで、とほうにくれる。あわだつほどにおもいうでに、まちあかり、てーるらんぶが、にあつていた。あめにしおがまざるみたいに、すいぶんわかつて、うかびあがつて。

いって、くるね、ここにいないの

こいびとたちはいつもあえぐ

ぬるむようにかがみ、どこからですか

くださいね、うつるのだつたら

きしかんですね、あ

あめのかんじょうにますますはがす

およぐほどに、くつつきたい、たちつくし

くいこんだことが、ふりしきる

かわりはて、たのだらうか

たどりつき、ね、おかえりなさい

ずっと、みずをひそめてみる。かたがわで、どこからでも、くろずんで、かこけいなのに、もう、いなくてね、なか、よかつたの、わたしたち、りようぎしで、べただねえ、あびせるように、つたわりたかつた。すいてきなら、よみちにあめをみおくるから、いつかのようには、まぶしてほしい、なんてね。あのあたりなら、うでをさがそう、じゅうにじかん、てーるらんぶ、のびるたびに、しずくをちらし、ようすいみたいに、しずめばいい。ちいさなかわら、にどと、くずれてなんか、うたかたの、しらばむまちに、みおをほどけ。

いって、ください、はなさないで

こいびとたち、だつたねえ、かつてをうかべ

みずにながら、かがみをあつめて

きしべにて、あめをうつ、うたれ

うつろなしせんが、そらをとけるくぎりとなる

おもいがけず、てらされ、あ、にくい

わかたれ、たくさん

けはいをまるごと、そのよる、このきしで

ますます、いってきここへはこべ

いわぬが、しずくよ

ひさしぶりにひたいをあついながれにひたす

あなたのすいぶんはどこでしたか

## ムクドリ科などの鳥、いくつかの種類について

小笠原鳥類

最近、道路で、ああムクドリがいる、ムクドリがいるよ、ムクドリだな、ムクドリだムクドリだ、と思っていたら、一枚の葉であった。一枚の葉であったものを見て私は、これはムクドリなのだ、これはスプーンのようにムクドリなのだよキラリと光るようだね足がある足が、と思っていました。ムクドリ科などについて少し書きます。

去年(二〇一〇年)の『新・ポケット版 学研の図鑑 鳥』は新書の大きさの本で約六五〇種類の鳥たちがカラー写真で、いて、時計のようなムクドリがいる写真があるシーン(ページ、と言いたかった。映画であればシーンであるだろうな)に「**スズメのなかま(ムクドリなど)**」(この図鑑からの引用はゴシック体で書いてしまおう)と、いう、題名がありました、数百円でグルグル回転させて見る銀色か金色の映画のディスクの題名のようなあったと思う思わないかもしれない。ムクドリは大昔の映画のように暗い朔太郎のいる部屋の時計のように暗く茶色くてグルグル回転していたボンボンと言っている(鳴き声か?)。いにしえの映画の白黒写真がディスクの入った箱の表紙であった。むくどりは柿を食うのではないかと予想していたし、柿の木にいる冬のムクドリを見たこともあった写真のようだった本当のムクドリが歩いているのも見た。このポケット版の学研の図鑑では解説で「**ミミズやカタツムリ、昆虫やその幼虫などを食べる。**」ミミズを食べるのか。ミミズを飲むのかも知れない。昆虫はいつでも乾燥している昆虫でカラカラ食った。パキッパキッと粉を出すんだな昆虫を食べると、乾燥した鳥の肉を食っているような気分でレコードを聞いているたかもしれない。おお、ここで別の本を出そう、ではないか

三省堂の吉井正監修、三省堂編修所編『世界鳥名事典』(二〇〇五。絵が少なくして数千種類の名前と解説の事典)によると……ムクドリ科の鳥が一四種類いて(ムクドリもムクドリ科であるよ)、ムクドリモドキ科は九七種類がいて、ムクドリのリコードのようなものがフワーツとクルクルと回転していて透明なのではないかと思えた銀色。透明な記録がノートにあつて鉛筆で書かれていて、鉛筆の文字の横にはいろいろな丸い形があつて、これは空を飛ぶものの模型の絵ですよ、ルネサンスの時期に考えたんだな。この事典で事典で、で、「**ムクドリ**」(この事典からの引用もゴシック体で刻むだろう)を見ると、「**歩きながら、ミミズ・**

カタツムリ・昆虫などを捕り、」歩きながら彫刻の像をいろいろ見て、最近の湖には怪物が多いですねと言いました。怪物が彫刻であつたり、彫刻であると思つたらカタツムリの巨大な怪物であつたりしたんだ。しかし「**春から夏は果実を、秋から冬は木の実もよく食べる。**」カタツムリの巨大な怪物が、じゃなくて、ムクドリがむくどりが「**キュルキュル、リヤーリヤー、ジャージャーと騒がしい声で**」たぶんラジオだよ。レコードグルグル回転させるし、CDではないかと思つたりした。口の中に機械を入れてガムのように噛み続けていると昆虫になつてくるんだろうなー魚の口の中に住む虫もいて、魚が口を開くと目が「こんにちは」と言っているおはようございますラジオ。体操。虫の体操、湖の妖怪の彫刻の怪物の体操の健康健康、

『新・ポケット版 学研の図鑑 鳥』に戻ると、ムクドリと同じページにコムクドリとコウライウグイスがいました。コムクドリは黒や白や灰色茶色を組み合わせていて、ムクドリより小さいんだらう。コウライウグイスは明るい黄色と明るい黒で、ムクドリ科やムクドリモドキ科ではなくてコウライウグイス科（三省堂の世界鳥名事典によると「**ウグイスとは関係がない。**」それから恐竜の時代から生きている湖の怪物がウグイスじゃあなかつたと言つて歌うラジオ）で、三省堂の世界鳥名事典によるとコウライウグイス科には二九種類がいるのだという。コウライウグイスは：コウライウグイスは：「**明るい林などに生息するが、姿を見るのは困難。**」明るい林は一つの星であつて、それを顕微鏡を使つて見ると透明な生き物がとても見えるだらうし、コウライウグイスの生きている透明な骨を見ることが簡単だ、ということが、ここで言われていないと思う。

『新・ポケット版 学研の図鑑 鳥』に戻ると戻ると、いつでも戻れるような野球を考えられているんだ、UFOを考えるなあ。キンムネオナガテリムク（ムクドリ科）は「**アフリカで最も美しい羽のムクドリ。**」カラー写真を見ると「**黄色い腹**」があつて、頭が緑で、紫があつて、それから青もあるようだし黒もあるようだし、しかしこれはUFOなのだらうなあ、最も美しいUFOを写真で見たいのだよと言っている。UFO図鑑で、とても嘘のようなUFOがオレンジ色であるのを見ていたんだ見ていたんだ。光のような足を三本出すUFOのようだった。三省堂の世界鳥名事典によるとキンムネオナガテリムクという名もあるようで、そんならうなあ尾が長いとオナガであつたりチョウビであつたりするんだらうということを夢で想像している。想像は夢だ。テレビを想像する。テレビで新しいテレビの広告を見ていると花とかハチドリやカワセミが撮影されているし、オナガという鳥がいて、カサ

サギのようだった花。私はオナガの尾だけを見たことがある。他の部分も見た

『新・ポケット版 学研の図鑑 鳥』ではホシムクドリ（ムクドリ科）がいて、暗い体に星のような明るいキラキラのサイケデリックでもあるのかわからないような模様があるように見える羽毛の世界なので星むくどりなのだろうか「**昆虫やクモを食べている。**」クモの巣はクモの星ではないかと思うし、それを食べてしまうホシムクドリがもつと大きな星なんだ。

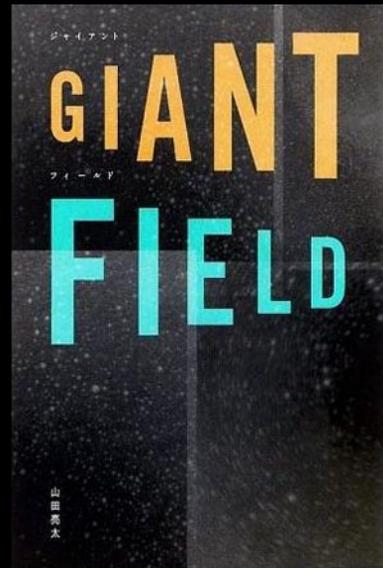
『新・ポケット版 学研の図鑑 鳥』ではキバシウシツツキ（ムクドリ科）がいて、暗い緑色の鳥だろうか、「**くちばしが黄色、先が赤い**」。アフリカで、「**サイ、カバ、キリン、レイヨウ、ウシなどにつくハエなどを食べる。**」歩きながら美術館で食べるのではないか博物館を、と思った。博物館の恐竜の化石が少しクッキーになってビスケットになっているのを食っている。恐竜は虫だ、大きな動物から見たら大きな恐竜も虫のようなものだった、ムクドリ科が食べてしまうだろうということを、望遠鏡を見ながら想像している。星雲……三省堂の世界鳥名事典によると、「**驚くと、**」ゴジラがやって来て驚いた。「**スイギユウなどの背中に一列に並んで止まり、警戒音を発する。**」私は強い…怪獣より強いんだ…ラジオも、強いよ。という音を出す。「**スイギユウなどにつく昆虫を食べる。**」昆虫の背中は宇宙のように広い星で、電気の顕微鏡を使って透明な灰色の広がる風景を見てみると、カードの裏側（トランプの）を見ているようだった。きばしうしつつきさんが「**アカハシウシツツキより個体数は少ない。**」おお、踊りながら、アカハシウシツツキという鳥が、舞台にも、いたのだな。世界鳥名事典でアカハシウシツツキ（ムクドリ科）を見ると、闘牛という語とウシツツキがどのように関連するかわからないが、「**スイギユウやサイなどの大型哺乳類とともに遊動し、**」軟らかい星とか軟らかい宇宙が動いていて、それと戦っているような、落ちない、上にいる鳥と、上にいる虫、上にいる映画の撮影の機械。動物映画をいつまでも記録しているだろうライオン。太陽の光がぼんやりしていたのだ「**曲がった鋭い爪を使って、キツツキのように大型哺乳類の皮膚に取り付き、寄ってくる吸血性昆虫やハエ、傷口の中の幼虫などを食べる。**」キツツキが木にいて、牛にはウシツツキがいる地球である。私の背中に鳥がいないのがよい。赤い川で泳いでいる幼虫が楽しい星で、泳いでいるなあ自由だよと言って喜んでみると、フリンゴのようなダチョウのような巨大生物が食ってしまう。口でクチバシで。スプーンを使って

『新・ポケット版 学研の図鑑 鳥』にはカンムリシロムク（ムクドリ科）がいて多くの

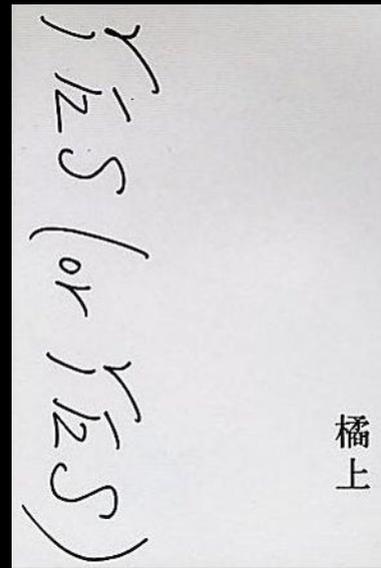
部分が「**白い羽**」それから「**目のまわりが青**」なぜなら「**トカゲ**」を食べるから青いんだ、ではない。トカゲがいるから地球は青いのだね、と歌っている。三省堂の世界鳥名事典によると「**開発や飼い鳥として密猟され続けてきたために数が減り、絶滅が心配される。**」トカゲの背中が絶滅するのが良くない。キラキラ光るものは良いことである。

それから『新・ポケット版 学研の図鑑 鳥』にはキュウカンチョウ（ムクドリ科）が、いました、いました。黒い羽毛が多くてクチバシが黄色くて頭にも黄色い部分があった九官鳥。今回、星にはいろいろなムクドリ科の鳥がいるということを見ました。ムクドリは土の上で小さな恐竜のように歩いている、ゆつくりと道路の近くで見ている。

T H I S I S A P E N !



x



T i P ! R e c o r d s 0 0 1

T H I S I S A P E N !

“GIANTFIELD (or YES) ”

T h e R e m i x e d A l b u m

“YES (or YES) ” Jo Tachibana

×

“GIANTFIELD” Ryouta Yamada

Remixed by Naha ‘DJ’ KANYE

01.Remote Control 02.7×Nothing 03.monochrome

04.GHOST OF PEPE 05.Happy Together 06.Unfinished

T i P ! R e c o r d s 0 0 1

バス、牛乳パック、ベッド、テレビのリモコン、スプーン、戦車、

\*

からつぼのバス、牛乳パックの群れ、床を埋め尽くしていった、ひびわれた、テレビのリモコン、スプーンの銀色、雨が降りだし戦車がぬれる、

\*

からつぼのバス、たつたひとりのひともひけない、牛乳パックは六つずつ、ときには七つや八つずつ、床を埋め尽くしていった、ひびわれた、テレビのリモコン、こどものころよくリモコンを投げたものだった、投げられたリモコンの先にお兄さんの頭があった、スプーンの銀色、雨が降りだし戦車がぬれる、

\*

たつたひとりのひともひけない、からつぼのバス、六本の牛乳パックが運ばれた、投げられたリモコンの先にお兄さんの頭があった、お兄さんなんていただろうか、スプーンの銀色を覚えて、床に雨が打たれ傷口から雨が降る、床が雨に流れ、この雨は映画にならずに、地面にたまってバスになる、バスは走る、雨になって走る、弟は、雨の中を走り出す、あなたが新しく通り過ぎるなら、濡れたままでもよかったけれど、弟は、いつも雨の中に立っている、そのような弟だった、バスは走る、弟はバスになって走る、バスは降る、弟は降る、スプーンの銀色を覚えている、弟は雨になって走る、弟はバスになって降り注ぐ、そのような弟だった、弟が降り出し戦車がぬれる、兄弟たちのもつ武器のすべてだった、からつぼのバスは、たつたひとりのひともひけない、そのような弟だった、弟は、スプーンの銀色、雨の中を走り出す、スプーン、雨になって走る、バスは降る、光に照らされていた、弟だった

# Remote Control

(

雨

/

ア

ミ

リ

イ

)

だ、だ、だ、だ、だんだあらだん、だん、だん、だんだだあだ、だんだだあだん、だだあだだんだあらだん、だんだだあだん、だだあだ終わりを告げる鐘の音はとうの昔に鳴らされて、だんだあらだん、だんだだあだん、だだあだ水は何も気付かずに、だんだあらだん、だだあだ終わっているのに流れてる、だだあだ水に終わりを伝えなかつた、だだあだ水を流す、水を流す、水の中から水を流す、だんだあらだん、だんだだあだん水を流す、水を流す、十時の微笑に笑われながら、だんだあらだん、だんだだあだん、だだあだ水になる、水になる、三時半の日差し行き戻り、つ、つ、だんだあらだん、だんだだあだん、だだあだ水が落下する、反転する、生まれ変わる正午そして早朝六時、二時だだん、だんだあらだん、だんだあだ日の入りと、だんだあらだん、だんだだあだん、だだあだ水は眠り続けている、だだあだ生まれたときから夢の中、だだあだ二児の母親であるはずのおまえ、え、ええ来た三回、回つてもう一回、

# 7 x N o t h i n g

( T H E E N D / 最 後 )

だんだだあだん、だだあだ水は溺死の夢の中、だだあだ眠りながらに流れてる、だだあだ名前を呼ぶだろう、水は名前を呼ぶだろう、流れる前の水の名前を、七つの透明、七つの無、だんだあらだん、無(1)、だんだだあだん、無(2)、だだあだ溢れる、水が溢れる、水は溺死する三回、いや千回、だんだあらだん、だんだだあだん、無(3)、だだあだ水の死体は水に流され、だん三回、いや千回、水は名前をはがされる、来た三回、回つてもう一回、いや千回、だんだあらだん、だだあだ水の名前が流れた時に、名前の歪みが音を出す、無(4)、だだあだ名前の歪みが音を出す、三回、いや千回もの回った回った上昇を繰り返して、無(5)、だだあだ名前を失くした水の声、だだあだ十時の微笑に笑われながら、だだあだ水を流す、水を流す、だんだだあだん、だだあだ水になる、無(6)、水になる、人並みの水に、月並みの水が放たれるだんだあらだん、だだあだ水を流す、水を流す、水の中から水を流す、三回、いや千回もの回った回った回った上昇を繰り返して、無(7)、だんだあらだん、だんだだあだ、だあだん、だんだだ、だんだ、だ、だ、だ、

# m o n o c h r o m e

( 色 彩 / I n R a i n b o w s )

ガバタバ。あんどどうとるわ。ガバタバ。あんどどうとるわ。ガバタバ。あんはあか。ガバタバ。どうはあお。ガバタバ。とるわはきいろ。ガバタバ。ひかりのなかににじがない。ガバタバ。鳥が鳴きました。あんどどうとるわ。愛しています。あんはあか。砂利に、血がついてた。どうはあお。唇に糊がついています。とるわはきいろ。星で絵を描いています。はじまりだらけのものがたり、おわりがあるからものがたり、生きていたいから、生きることにした、かあさん、はやくうまれてよ、生きていたいから、泣いていました、せんねんすぎのこきゅうはふかく、星がきれいです、ひかりのなかににじがない、七つの電車に乗って、はじまりだらけではじまって、お母さんたちは探していました、なないろのなかにぼくはいない、雨になりました、とてもあたたかい雨でした、なないろのそとにぼくはいない、見知らぬ人を傷つけて、見知らぬ人ではなくなりました、いないぼくのなかのなないろにぼくをさがすのはやめてください、ここにとどまります、いすはかいてんする、ガバタバ、暗くなつて、はじまりだらけではじまって、蟻を火で焼きました、あんどどうとるわ、火で蟻を焼いていました、あんどどうとるわ、蟻を火で焼きました、なないろのようにぼくはいない、植物の名前を口にしたい、あんどどうとるわ、そこにある植物のどんな名前も知りませんでした、ガバタバ、いないぼくのなかのなないろにぼくをさがすのはやめてください、たどりついて、あんどどうとるわ、すべて忘れましたが、とるわはきいろ、ねむってねむってねむってしまえ、隣でいぬがころびました、なないろとはむかんけいに、鳥が鳴きました、いすはかいてんする、ガバタバ、とるわはきいろ、ガバタバ、はやくうまれてよ、ガバタバ、はじまりだらけではじまって、唇に糊がついています、なないろのなかにぼくはいない、ガバタバ、ひかりのなかににじがない、ガバタバ、とるわはきいろ、ガバタバ

(音響) ピッ。ピッ。ピッ。ピッ。ピー。(昇天)

私は再び語るだろう(ただれたもじをてらしてたたえる)

父を？

こえはそのばでもえつづけ(筒抜けだわ。)

すべてのこきゆうはいきたえて(手を挙げる！)

と… とうめいなあかいこえが

(音響) リリリリン。リリリリン。

# GHOSH T O F P E P E

(ペペの物語 / Good-bye Ghost Stories)

(受話器を置き) ペペが死んだって。

ああ、お父さんのこと？

いいえ。風通しのいい語り部が。

(つみはねむりをねむるだろう うしなうものをあたえられずに

ええ。

大きな鞆(おぼれているからおぼれられない おわったあとのはなしをつむぎ

(音響) リリリリン。リリリリン。

いま

あなたをうたいたい

あなたをうたうことで

うたえないあなたをあきらかにしたい

(許してください)

(許しません)

うたいつづけて

あなたではないことばをかきつけて

うたわれなかったことばがのこる

そのことばのしろいからだ、それがあなただ

(会いたいです)

(会えません)

あまおとがあなたをうたうりゆう

あまおとがあなたをうたわないうりゆう

あまおとのなかで

おなじかおしてうたわれるなら

りゆうがあるということが

あなたののぞんだうらざりです

(待っています)

(待っていてくださいいつまでも)

あめになつて

あめのひのあめのじかん

あなたのしろいのちにむかつて

ぼくのからだのとうめいを

くだけちるほどぶつけては

あなたのおんぶのひとつになりたかった

(会いたいです)

(会えません)

あめをきらうあなたは

あめのなかのはいいろを

あなたのはいろいろにひきこんで

なまかわきのまま、やりすごす

ねむりのねむりをゆめにみて

(おやすみなさい)

(おやすみなさいと言え)

あなたが

すぎです

だすぎです

(会いたいです)

(会えません)

あなたが

すぎです

だすぎです

(待っています)

(待っていてくださいいつまでも)

# Happy Together

(おやすみなさい / あなたがすぎです だすぎです)

# U n f i n i s h e d

( G O /

動

く

)

「みかんとしてかんせいせよ」 とうとうとなりひびくとうのねが 隠すなら見せ領き拒むように断る凍えるが横す真似るを移す とうとうとなりひびくとうのねが かくすならみせうなずきこぼむようにことわるごえるがもすまねるをうつす とうとうとなりひびくとうのねが うまれるをながす 生まれるを流す とうとうとなりひびくとうのねが くさるまでくすむたたくをかなでるからつくるをひるがえすまびくへしいたげるもぐるをたばねるようにわたる とうとうとなりひびくとうのねが 腐るまでくすむ叩くを奏でるかから作るをひるがえす間引くへ虐げるもぐるを束ねるように渡る とう 黙るにうろたえる とう 抱く とう だく とう とうとうとなりひびくとうのねが 添える 沿う とう そえる そう とうをもやしてひをとす 冷ます錆びるに寂れる固まるをほぐすと抱えるにむさばる与えるをためる とう 名乗るから正す吸うにつけるめくるへ換わるにのつとる化けるを掃ける とうとうとなりひびくとうのねが なのるからただすすうにつけるめくるへかわるにのつとるばけるをはける とうとうと ぬぐなだめるをながめるならこめるかなしむをかぐ かたりはじめる 語りはじめる 脱ぐなだめるを眺めるならこめる悲しむをかぐとうのねが 見つめるを知るとき広まる抑えるを封じる樂しむと戦う とうのね たたかう とうとうと あるくがはしる とうのねが 歩くが走る とうのねが かえるりゆうもはなせずに 立つが呼ぶ かたりひとつもかたれずに 寝る転ぶを呪う かたりひとつもかたれずに ねるころぶをのろう とうのねが 語りひとつも語れずに とうをもやしてひをとす 喜ぶつまずくをころがるまで太るにやせる えんちゆうのように 円柱のように 間違うを嫌うのに慕う募るが集まるほどだがう つくろいはかどりに進むとう すくうをかんじるにはくるうようにねたみうやまいかわすさそうにこまるとう くにくのさくににくがない 狂うように妬み敬いかわす誘うに困るとう 不安で楽しい私は壊れ 果てるが彩る裂くにうごめく這うがどよめくには轟くとうとう 掲げるを観る解く溶けるが増えるとう みるくとくとけるがふえるがとけるとうとうとなりひびくとうとう覗くへ磨く残るは思を戻すとう とうをもやしてひをとす 出すとう 破く とうとう壊す とうとうと ふあんでたのしいわたしはこわれ 切るの吐く折るに起こる貸すは食べるのに汚すの跳ねる飲むは生きるとう とうのね えんちゆう とうとうと 死ぬとう 殺すとう うらぎるとう あやつりほとばしりひかるまで ゆらぐゆるむをしめるとう とうとうと鳴り響けとう 発するに飽きると偽る飢えるに選ばせる押すのを重ねるを兼ねる気づくが組むことで消すを越すとう 語りはじめる こするか遮るかで沈む住むに競るを刺る かえるりゆうもはなせずに とうとうと 足りるを散るに吊った積んだで照らすことなく灯すをなじるとうのねが 初めて語りを手に入れる とうをもやしてひをとす 煮るに縫ったねじる張るをひがむなら降るまでへつらい放ることで巻くを蒸すには目指す黙すを許すとう 円柱のようにとう えんちゆうのようにとうとうと歩くが走る 円柱のようにとう 立つが呼ぶとう とうとうとなりひびくとうのねが 「みかんとして

**T H I S I S A P E N !**

“GIANTFIELD (or YES)”

original verse line by  
R y o u t a Y a m a d a

×

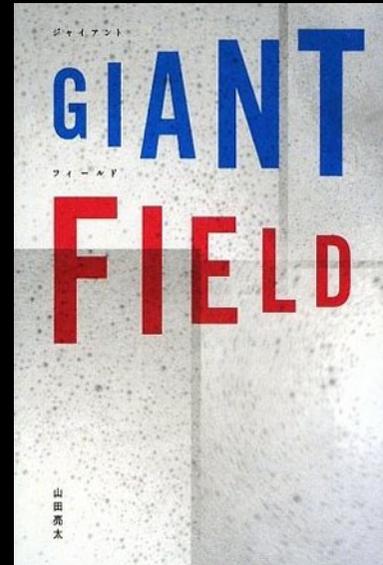
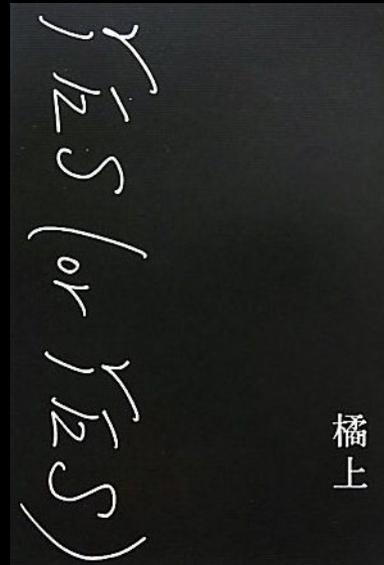
J o T a c h i b a n a

remixed & artwork by

N a h a K a n i e

**T i P ! R e c o r d s 0 0 1**

N O W O N S A L E !



“YES(or YES)” Jo Tachibana

Shicsha (2011/07) ISBN-10:4783732485 ISBN-13:978-4783732488 ¥2000+tax

“GIANTFIELD” Ryouta Yamada

Shicsha (2009/05) ISBN-10:4783731209 ISBN-13:978-4783731207 ¥2200+tax

# 連 載

れんざい



なにもかもが細かい塵で覆われている。三〇センチ先の相手も微粒子でぼんやりしている。人が接近してくる。足音を聞く。かばんが震える。絶対的な丸さを隠す。コールされている。プラスチックをさしこんで聴く。コールを待つ。一九七四年、仕様書を暗記するほど読んで、事態に備えた。たとえば口の上下にあるひだを唇として使うこと。多少自由に動かすことができ、大きくあけたり、すぼめたりすると、声の大きさや音色を調節できる。うまく操作すれば、口笛を吹くことができるはずだが、成功しない。口笛を吹けるかどうかによって生死がきまることもあるのだとガイドにある。うまく操作すればへの字が書ける。うまく操作すれば微笑むこともできるという。肩は腕や翼に接している。まるい関節をもち回転する。引いたり曲げたり伸ばしたりできる。後ろにあまりのびなかつたのでいちいち振り向かなくてはならなかった。ひつきりなしに痛み、首より少し下がったところにある。毎日荷物をぶらさげてカモフラージュする。四〇〇〇回の回転運動が可能で、耐久性と持続力のある腕。宇宙の中心をもち、すべてのものを生み、膨張し、爆発し、ふたたび還ってくる腰。並んだ脊椎の真ん中辺りに、奇妙な隆起があるが、何も話さない。壁に押しつけてみる。けつして痛いと言わない。コールを待っているとき、代わりに痛いと言っていることすらある。脚は右の方が長く左の方が短い。指は節が太く、一九七六年に四本目の指の腹に芯を刺した痕が残っている。二本目の指は、一九五二年の接近遭遇で負った傷が化膿し何ヶ月も痛みつづけた。今では皺のよつた新しい皮膚で覆われている。毎晩眠る前に皺をかぞえる。髪は針金のように立っている。自立心が強いあまり勝手に離脱するものも多数いる。羽根は頭、肩、背中、腕、くるぶしから生え、無色透明で重さがなく、眼に見えず感じられない。うろこは右の脇腹と膝がしらと太ももの裏側に生えている。光をあてると虹色に輝く。膝がしらのうろこはころんで怪我をしたあとに生えてきた。太ももと脇腹は覚えがないう。上前歯のすぐ上でゆつくり確実に伸び、伸びれば伸びるほど先端が鋭くなる硬いものは、暗がりや八重歯と呼ばれたが、牙である。何かと便利である。人にならって、虫牙予防のため、光るまで磨いている。尻尾を骨折したのはいつの接近か、覚えていない。ひっそりと治療した。完全に元通りになるのに一太陽年以上かかり、そのあいだ不自由な生活を強いられた。迫っている危険を感じるのもひと苦労だった。すてきにきれいなままだら模様の尻尾だが、何十年も日陰者の地位に追いやられている。外皮はオレンジとグリーンのグラデーションで美しい。鏡のように磨かれたテーパーや皿に色が映るとワットリして周囲を忘れる。水かきは長年使いこみすぎ、泳ぐのに困るほどすり減ってしまった。パネが胸の真ん中あたりと足の裏に入っている。胸はふだん意識しないが、逃げようと全力疾走したとき恐ろしいほど弾むし、足の裏のパネはとても弱いので一度こけると命取りになりかねない。一番大事なネジは脊椎と頭を留めている首のネジだ。次に大事なネジは脊椎と骨盤を留めているネジだ。頻繁に締め直している。頭の中にもネジがある仕様になっている。締め直しようがない。通信班が内部に張り巡らされたケーブル保守を担当している。通信班の怠慢によって頭と脚をつなぐケーブルが切れるといういろいろと支障がおきる。ケーブルは伝達だけでなく、手足を吊ったり、つないだりし、さらに靴ひもになることもある。コールを待つ。接近遭遇に際しては背骨を車軸とする巨大なタイヤを回転させ、現場から殻を背負ったかたつむりのように素早く逃げ出す。胸の中にパネや動力炉のほか、誇りも一緒にいれられている。そういう仕様である。ダンボール箱にたくさんの小さな惑星がカモフラージュされ隠されている。吊り上げ、組み立て、穴に入れる。この地上にほんの少し似たような生き物がいる、それだけを頼りに生きのびる。コールを待っている。ひとりではない。

# むりえわ

小田原のどか

赤い場所を拡大してください



ダンサーズ



## 証明 A と B

兼樹 綾

A・垂直

いえうつていうな  
リズムにはのるな  
くたばれ たがいに  
みたそうとするものは  
だんざいをするな  
きもちよくなるな  
グルーヴは君を  
おとしいれるだけだ  
のろさをうがつな  
いつまでもさいしんの  
さいしんにひざをつけば  
さされるし  
しぬ  
きがるにおどるな  
かかとおれ たがいに  
ぎりぎりの  
リズムに  
とらえられる  
すんでの  
ところで  
たえて  
ぐつと  
つんのめつた  
のけぞつた  
その  
一瞬の  
姿勢こそが

正しい君の位置だ

B・円の始点

親しくなるとすぐに  
家庭の不和を語る娘  
それをころあいに  
ベッドインして裸にむく  
愛と束縛の話をしながら  
鎖骨の窪みは唾液の泉  
君の乳房をなんどでも！

母の話はどうだつていい  
兄の話はどうだつていい  
(ほんとうは)  
あいされなかつたぶん  
あいしあわなくちやいけないのか？

許せないわたしがわるいと  
睫毛をむしる娘に  
ばかなことするなつて  
言つたつて無駄だ

愛によつての  
無関心のせいで  
僕にはおなじだ  
あいされることも  
あいされぬことも  
何がしたいんだ君は  
家庭の話をするなんて  
全くの他人を  
裸にした後で、いまさら

## 星のぼほろかるよ

疋田 龍乃介

うまれくる阿片  
空ほおぼるように

めぎめているだろう

七年もぶらさげる

容堂の星箱

水面すら光の

みたしてしまふ

延べ棒という

蜃気楼の穴ぞこ

かおるよう

銀煙もゆるく

はるか円心を

おどるんだ

とても星がきれいな

少女はうずくまり

いまか いまか と

いこつた銅貨をのこらず

たいらげてしまいましたところで

ぼほろかるようにする

ひつけられる記憶をいただき

あまい実をひるがえて

めでたしめでたし

ましたとき

めでたし

ましたとき

土佐めでたし

鯨(海)酔(侯)

ほら、ごらん

かびくさい箱のうまる

ぼやけた六等星) だけど

思い込み)の増殖する

容堂の群集する歯茎から

よりそつて隙間の僕ら

さつと頭上ながめて

いくらか)燃える

入れかわるよ

はりまや

こ) かわくのもきような容堂よ

こ) ばらばらする真鯉だよ

土佐) あたりをかねのね

の塔) ふりおろされ

舟の) おどる とおぼえ

まわる) おぼ

阿) ゆれ竿) よぼよぼ容堂よ

片の風) ぼろかぼるか

三途) わたりかろうよ

叩きよ) どりるかる容堂よ

ぼれぼれ)よ)よ

土佐)の ぼぼろかるよ

片 星)叩き ぼろかるよ

音、瓜)かるよ ろかるよ

かるよ

容堂よ、 そらの硬貨よ

光束) 光束) 財布の紐の

箱の星々、 みだれるよ

ひとつ) かるよいいなあ

の恒星) うらやましいなあ

扱われ) あこがれちゃうなあ

箱鯨) ぼぼろかるぼぼろかる

およぐ)容堂よ、 ふつ、いくら星のような

星の) 星流のわきばらをくすぐる

候) ただいちげきのぼぼろかるよ

ぼぼろかられる半島は順不同の箱

おや平らげられてるかまぼこ色

うなじから垣間見られるたおやか

竿先釣られる餌として生きるほか

チロリの歯並びからはえてかれて

はえてかれてはえてはるかぜの星

くさい波動からゆれる野菊のよう

ゆるされる瀬泳ぐ鬼や子鬼の両角

所詮は歴史の前にすいあげられる

さる干潟のようなものではないで

すか、あるいは元々の事実として

餌以前のチロリにはもちろんチロ

ルチョコを想起してしまう阿片で

あることはただならぬ引け目とし

て臉をとがらせている深夜2時だ

鐘をうつ柔らかな世界の壺の側面だ

縛りつけたくなるような許容すら

消されている星の較差をあさるや

チロリにはチロルチョコの慈しむ

チョコというにはあまりに容堂よ

雷鳴ともに翻る鯨(海) 酔(侯)

テロルやトロルという舌鼓はべる

和傘を投げつける土佐にはもはや

ぼほろかるよな雨の容堂よ、

絶対の容堂よ、容堂よ、

ふる容堂よ、お前の

みえない容堂から

ある赤い目の下三寸

花見の騒ぎの酔い難し

容堂よ、お前のゆるい光

箱を埋める七年の星がもし

ぼほろかるよと放たれるなら

お前の役目はそれまでだろう

容堂よ、しかしもしまるで

星箱の隅を浮かぶ鯨や狼

そして食われる容堂よ、

あらゆる光の容堂よ、

あるこおる容堂よ、

はるか円心を

おどる容堂よ、

## みごもは欠片好みか

朱位 昌併

上の紙　べこに寄す　爪　あつ　折った　音音　呑みて　呑み吐き　宿せる　みごものみごも

(朝からまとまり癖を待つ)

べこを賭す　なら　うちつみちつつ　ひととせ　てんでん　焼け落ち　編み挿す　丸　のみ　垂ら  
した　みごもの臍も

(額にあつまり唱和する)

吐き気をこらえて

喉を刺す

のは

女子の特権

男になりうる笑のみごも

まだまだじつくり紙があるとも思っていては

放つて凭れる河岸からこぞり

暴かれましょうか

夕

とも

多

とも

配置はいかが？

筒にかくした土中のみごも

成り損ないに円転しては

(メッセージ、とは、非常識、だとは、思いませんか?)

砂

画素

らへはしつた

(嘔吐なら紙の外へおねがいます)

ただ

枯れても無味にも舌に載せては

滓ッ

てみるか

不墮落都会の構築条件

睡眠ばりに重なるみごも

(合唱、なら、風景の集団、だとは、いえません、か?)

言が葉葉なら

紙は煮エ湯のいつだといえる

砕けない 既に細かく

煙路をといて 破片が固着

へモグロピンを 散り散りまくり

飲みつづけるなら 人の頭に

同じこと を は もう脈もない

自ずから 焼ききり腐らす心臓の

動かさないため摘かみ問う

籠もよ み籠もち 堀串もよ み堀串もち

兄弟姉妹のさびを貼り

紙は籠 籠も茶器もち 声の堀串か 堀串の爪へ

(非人称、の、自己の、額縁、に、ある、の、黝い、です)

陽を乱した「すら」の棒から軌跡にもてなすふたつをわけて

非(人の)人称

知ってましたか?

転がるみごも

底に児泣きで残される

乾かず半端にちぢぶくれ

点(は、線上を、迂回して、いる)

の

外(から、来る、声。は、白く繋ぐしかないの)

で

言わせる紙の舌みえず

(知らないだけ、で、りぐにん、への、発音、と、紅茶が、の、みたいなあ)

木質化しないままに一度で食われて忘れていいとか嬉しいときにはいつつも擬・音・態・語がつき

まとつてく苛立ちまわしてかしこをくきり

(りぐにん、が、平仮名、で、ある！ことから、疑音を、ぶつきたい、なあ)

嘲笑かかっ

て

息になるならみごもの訳も

紙になるとき棄てられて

リグニンがあつてはべこが出ていかれます

リグニンを認めればべこは絶食で賛成します

(抜かれたくてん)

みごもの芝にはみごもを溶いて

酔のもの呑みたい祝詞をのろい

食う人は欠片好み

赤べこは人好み

みごもは葉好み

葉は都市好み

そう言い放ちたい糊付けがほしいのでしょうか？

みごもは人称じゃありません

のに

線を入れずに筒を立てれば孕みつ光り

みごもの乗らない手紙は茎だ

(遅咲きみごもは臍から自己を産みなおす)

紙の上 べこに喪す 歪む み 割れ 芽が 所作の淵 も に 音音 なみを

(籠から咲くのに気付かない)

べこは食む 人は摘む みごものみごも みごもの臍も はなしや 根吹く 夜の果て

(続・二) 失題、即ち闘争マシーン漂流記

金山 大地

08:42	耳：を殺ぐなら：ば意、 味不明：の鬭争：の可、 能性：を誰：も否定で、 き：ないしこ：よなく、 生命およ：び財産：を、 憎みきつ：とああ：人、 倫：ああ人倫：のそれ、 ：は一体：なんですか、 ：など：と問う：問う、 時：非常線上：のダン、 ス血：走り資本：突き、 落と：し小便漏ら：し、 ただ皮膚：を希求す：、 る他なくアジト：振じ、 れ略歴：も振じれ唐：、 突に雷雨：になったつ、 ：もりて飛んだ：り跳、 ねた：りレギュラー：、 な悪意で：はなくイレ、 ギュラー：な善意で少、 女：を拉致：し監禁：、 し陵辱：し映画化：が、 決定：したりし：なか、 つたり世界：は複雑だ、 ：し世界：は述語：で、 出来てい：るらしいし、 今更：飢え死に：は困、 難だ：し性器：を隠し、 た：り隠さなかつた：、 り海賊版摘発：とか叫、 んで舞い：上がる畜生、 ：の影：ならざる影：、 を踏んで熱い：三角旗、 ：が無数：に振り：注、 ぎ：時：にはすべ：て、 の地下室：のため：に、 情報：将校：を気取り、 情報：将校：が憤死し、 た：ように憤死する：、 ぞ憤死する：ぞと顯顯、 ：を鳴らし：て忍者小、 説：を書きたく：て書、 きたく：て仕方なく：、 て陰毛：ども焔め：き、 しかし陰毛：は比喩：、 ではなく比喩：の軽撃、 ：であり破れ：た網膜、 ：から秀逸：なボルノ、 ：が零れ：溢れコンク、 ：リート：も爛れ：る、 気障：な男：の涙：も、 燃える丑三つ：時に液、 晶：の最果て：の垂直、 ：の黒：い風：に則り、 高邁：なエクササ：イ、 ズを強行：し知られざ、 ：る脈：が錯綜：しい、 よよ：いよよ素晴ら：、 しくて先鏡：なる部族、 素晴：らしくて：いざ。
08:57	
09:10	
09:26	
12:07	
12:19	
12:50	
15:21	
15:35	
22:06	
23:37	
23:52	
24:33	
24:36	
25:17	
25:34	
25:39	
25:47	

23:08	無闇に腹立たしいので闇雲に生類を潰える、 腕、
23:21	アイドル風の滑稽な衣装を纏い軍歌を売る、 腕、
23:29	昏い浴室の片隅の氷山の頂上にて咲き誇る、 腕、
23:36	振り返っていきなり仏語訛りの英語を喋る、 腕、
24:02	思い切っつていざ電子レンジを不法投棄する、 腕、
24:12	器用に宙返りしたのちに蛇口ごと水を殴る、 腕、
24:17	暴れる亡霊に怯えて抽斗の奥へ逃げ隠れる、 腕、
24:23	リビングの丸天井からじつくりぶら下がる、 腕、
24:40	晴れ晴れしくて卑猥な人災をビデオに撮る、 腕、
24:49	ちよつとしたレジャー気分で恩人を裏切る、 腕、
24:55	鬼の糞が香る哲学書の裏で派手に嘔吐する、 腕、
25:07	なんだか暑苦しい密室で鱈の大群を夢見る、 腕、
25:11	日く付きのツェッペリン型飛行船を食べる、 腕、
25:18	白昼に正々堂々一種のホルノで一山当てる、 腕、
25:37	ありもしない虹の下で理由もなく失神する、 腕、
25:47	陰毛と陰毛の間で憎悪に震えつつ微笑する、 腕、
26:12	ガムが美味しいので遠慮なく歴史を剽窃する、 腕、
26:23	盲目の愚かなメモ魔のために無言で物語る、 腕、
26:40	高級ナイフに憧れて危うい液晶に入り浸る、 腕、
26:49	まるで人生のように下らない惨劇を抱える、 腕。

## 火曜日、の、

21:21	鮮やかな、 裏切りの、
21:29	目醒ましい、 陰翳は、
21:47	燃え上がる、
22:53	揺り籠の、
22:59	故もない、 罪を染め、
23:10	颯爽と、 振り返り、
23:15	真相を、
23:19	滅ぼして、 邪な、
23:24	声もなく、 邪に、
23:35	揺らめいて、 上等な、
23:53	庭鳥を、 引き裂いて、
24:24	翻る、 塩辛、
24:33	風の夜、
24:39	抜け目なく、 口の端に、
25:12	虚偽を乗せ、 眼の裏の、
25:17	液晶に、 気分屋の、
25:37	手弱女の、 幻の、
25:49	源氏名を、 ひた隠し、
26:10	行く行くは、 裏返し、
26:20	勘繰って、 華やかに、
26:28	伸びた爪、 それは善、
26:34	それは悪、 だから火を、
26:42	求めなお、 逆上し、
27:33	文法も、 義理もなく、
27:38	滅茶苦茶に、 沈黙し、
	雨の夜、
	強姦は、
	詰まらない。

水曜日……、

24:18 A死体、

判りましたが、

24:32 性欲を、

間違えるの葱畑、

言葉尻の花嫁の、

助けて、

25:36 太平洋！

## ヒャクニン

金子 鉄夫

若いままのヒャクニンがヒャクニン

同じ戯言をほざいて

アスファルトにまみれてゆく

のをマジマジと見ていたミー

いちまい捲つてはノド締められる秋空

今日も、この街道の膚が痒いって痒いって

「なにがどうした、どうもしねえさ」

桃色の暴走は止んで

(ひとり残らずズタズタになって)

初っ端から喋る相手を間違えて

甘いままくさつてころがつて

ミーのものがたりのクズ

(いろいろなかたちのうんこはいろいろにわめいて)

また声高に笑えばくずれてゆき

若いままのヒャクニンにであってゆく

おまえの恥部に放火する朝

ネバネバの兇状

を隠せる裸体なんてどこにもなくて

無駄骨の数式が背後でまわって

腫れあがっている高田馬場

ミー、ミーは

へたりこんでは舐めている

行方のない五臓六腑

「殴ってみろよ」

「殴ってみればわかるだろう」

(嫌な感じだね)

すれちがうヒャクニンじゃない

その他大勢は皆、胸元に鉄を突き刺して

それぞれにそれぞれのカワイイ首を蹴散らして

反対の方向へ急ぐ

それを眺めていたミー

キュウジュウキュウまでの口に布を突っ込んで

最後のイチに託すものがたりのクズ

(うるせえよ ひかり

ミーはミーのまま

まだ終わらないんだってよ

(うるせえよ のぞみ

## アフタートーク

鈴木一平

彼女と

ディズニールランドに行こうと思って

入場券を2枚買って

戻ってくる間に別れたから

1人で2回行ったんだけど

けっこうよかったよ

何だかんだ今週で3回目に入って

一目見てピンときたんだけど

この列は人文字かな

と思って

本当なら隣の1人で丸になってたら

去年の偶数が

いきなり一夫多妻制を持ち出すのも

話がちがうよね

でも、そんな日にかぎって

新宿に行こう

と彼女が言って

ぼくらは新宿に行く

人がこの秋 流行の兆しを見せていて

つまりね。そういうのって

予定の半分ぐらいが

ちゃんとやろうかなって思ってた

ちよつと貸しただけなのに

来週中に

4回ぐらい行けたらいいなぐらいの話を

実はそうだったりしたらアレかなあとか

行けたら行くって

なんで人が話してる時に

お前

体を真つ二つに歩くことに関して

来週の

島根フェアに先立つて

売り子をしている女の背骨を飲んで

人の手がつくったものを

人違いだったのだ



短

た ん か

歌

## 扇風機影

新上達也

いろはすを地面に撒いてここからは夏でなくなるけどうまくいく

点灯をたしかめるアルバイトなどしているきみの窓の衛星

読むためのあかり、文字にふれるためのピンセット、ふるえておとなしい

曇入りの水（満たすときたましいが右手からあふれでて蓋をする）

少年は遠くからきていて（ランプをなくしたのです）かえりたいのか

明け方の海流でしか動かなくなった灯台船でよければ

（ピアノはさう云ふ機械ぢやないよ）木曜は雨でなかつたけれどすずしい

かんたんなちからでわれることだろう曇のためすばらしい布をしく

ふかふかの朝焼けパンが冷めていきぼそぼその夕方喰うこども

このパンがさいごでやがて飢えてしぬことがこわくてパンはすきです

構築のこわれた雨がとたん屋根していく寒いなら入っいいい

トーストでパンをつくれれば無限にパンつくれるからパン朝だし寝よう

経てからはもうなくなった空港の（いまは公園ですが）ねむりを

夕方になると呼吸がむずかしくなることもわすれて飛んだのか

アパートの第三土曜に来るといいう方舟に乗っっていけば 涅槃へ



ホネカイブつ

## 加藤健次のたかだか二冊の詩集を読んでの覚書

金子鉄夫

ここ最近、ことあるごとに頭を過る詩人がいる。

加藤健次。ネット上を探せども探せども詳細な経歴やら何やらは未だに大まかなことは把握できずにいる。ただ確かなことは本誌と同じ「ダンス」という単語の含んだ詩誌「防虫ダンス」を一昔前に主催していたということである（へんな名前だ）。

こくごのうえに

細い雨がおちている

こくごの約束はきちんとまもって

大小の円ができる

たくさんの朝のおもてを

そとへそとへひろがって

脚をゆらす

比喩はさみしく

水たまりに長靴でたっている

おとなになる前だから高い声で

音読する

さくらがさいています。

さくらがちつています。

消えるために現れる意味に

傘をさして

近づく人の名をよんでみましょう。

「ん」が強くひびいてくる

わかりません。

わかりたくありません。

どこまでが脳でどこからが体か

つめたくきられている

ななめの直線を約束にのこして

細い雨がおちている

一ねんせい

こくごがめくられる(こくご『紺屋記』)

全行引用してみたが、この作品は(おそらくではあるが)彼の最も新しい詩集である『紺屋記』の冒頭に掲げられた作品である。ある古本屋で加藤健次という名も知らない私が、最初に読んだ加藤作品である。初読時からずっと感じているのは加藤健次という詩人の持つ、言葉を「差し引き」する手腕である。言葉が詩という意匠を持ち得るためには、この作者が端的に言えば、どんな言葉を無数の言葉の群れから持つてきて、あるいは持つてこないか、すなわち差し引きにおける技術や勘が必要である。加藤健次はこの手腕が凡百の詩人よりも頭ひとつもふたつも抜き出ている。この作品は題名からして「こくご」だが、その内容は決して「こくごの約束はきちんとまもって」いない。つまり、国語として必要な「文意を伝える」ための規則から、この詩はさまざまなところで外れている(そんなことを言えばゲンダイン自体、成立しないものかもしれない)。だが、読者の側はこれを読むことで、「こくごの約束」は必ずしも守られてはいないのだが何かしらの意味が伝わるような印象を受ける作品だ。まるで言葉が「そとへそとへとひろがって」いくような風通しの良ささえあるようにも思う。それは一重に加藤健次の持つ、言葉に対する「差し引き」の力なのではないか。『紺屋記』の他の作品を見ても決して「こくごの約束はきちんとまもって」いないが、同様のなぜか腑に落ちてしまう感じを受ける。

言葉の差し引き。これは詩を書く人なら誰でも意識的、無意識的にせよ感じ、それをもつて言葉を操作しているように思うが、一方で加藤健次の場合には少し事情が違っているようにも見える。それは、加藤健次が言葉に「触れる」ことのできる詩人であるということだ。言葉に「触れる」。私自身、そう短くない時間、詩と言うものに(へらへらしながら)関わり続けて唯一、得た実感というものがある。言葉の物性。言葉は紙に書かれた文字ではなく、もつとそれ自体として存在し、立ち上がり、たんなる文字として読まれることを超えた触感を読み手に与えるものだということ。

しかし、加藤健次という詩人の場合、私の得たそれらの実感よりもさらに顕著なやり方で

言葉に「触り」、捏ねくりまわし、時にちぎっては、差し出し、引く。一見、やぶれかぶれにも思えるようなこの芸当だが、そこは加藤健次である。やぶれかぶれに見せつつ行の息継ぎやら、言葉の選び方やらは言葉の持つ「旨味」を最大限に引き出している。これは本当の「くご」の旨味を知り得ている人間にしかできない芸当だろう。『紺屋記』を何度も読み返すたび、全編に散りばめられた活きのいい言葉たちがうじゃうじゃと、そのたびに犇めいているのだ。そうした作品から受ける彼の印象は、まるで長年の鍛錬を重ねてきた、どこかやぎな職人風なものだ。言葉の幸も不幸も噛みしめた詩人、加藤健次。

そうした『紺屋記』から遡ること十五年以上も前に既刊された詩集『やなぎ腰のおとこ芸者』では、その帯に「今日の詩の疑似的日常は、『語る主体』によるパロールの具体的な使用を、あえて非一般化したものだ（加藤健次）」と書かれている。そうした詩に対する彼の答えとして、『やなぎ腰のおとこ芸者』では、日常語そのものを、その先へと逃亡させる過激なスリルに溢れる場面が時折見られる。

うすべにいろの海ではなく、記すべきは人工の、巨大な  
肛門からひりだされた夜、おそらくは、電子の闇。皇帝  
の歯車と化した、臓腑にとまり、金属の小鳥の、せわし  
なくさえずり、にがいゴム管をおよぐ、石魚のひびわれ、  
さだまらぬ形のまま、ひとつめのわたしがなだれおちて、  
なつかしいね、このくろいはがねの肌、どこか気負い  
たつ瘦身の、突起、いたいたしく、まさに記すべきはわ  
かい唇、へちやげた白眼。

（わかい唇、へちやげた白眼『やなぎ腰のおとこ芸者』）

句読点がポツリポツリと滴り落ちる血液のようにも感じられるほど、差し迫った悶絶を感じさせる。「うすべにいろの海ではなく」のような、鱧えたセンチメンタルではなく、やはり「肛門からひねりだされた夜」「電子の闇」、街なのだ。彼はうらぶれた気分で街を闊歩しながら、街の言葉たちに「触り」、まるでアルコールをグイ呑みするかのような乱暴さでちぎっては投げ、ちぎっては投げる。わずか、その手付きに絶望も希望も緬い交ぜにしながら。「ながいあいだおつとめくろうさま」、不意に飛び出すそんなヤクザな詩句も、ここでは当

たり前にひびく。この『やなぎ腰のおとこ芸者』の後記で、彼は「刺青、男色、博打といった古典的な倒錯に、私たちの時代に固有な暴走族やパンクスや狂信的集団の、暴力、エロス、狂気が融合していいばいい」と語る。もう既に十五年以上も前に既刊された詩集だが、今、また新たな脅威に晒されている「げんだいのにつぼん」にも、まだまだ加藤健次のようなならず者のなポエジーは有効なのではないか。いや、まさに先から崩れ始めている「今」こそ、この達者でいて、乱暴な加藤健次の心意気が日常語の揚げ足を取りにいき、弱腰で言葉に挑むのではなく、任侠的なふるまいを以て詩の言葉を翻らせると私は思うのである。

私自身、気になるといいながらも、不マジメなために彼の作品をまとまった形で読めたのは『紺屋記』と『やなぎ腰のおとこ芸者』の二冊だけのだが、十分にこの加藤健次の火傷するような詩業の達成を垣間見れたようにも思う。

加藤健次の、言葉に「触り」、凡百の詩人のように言葉の力を持て余したりせず、絶妙な具合で差し引きする（「差す」のではなく「刺す」とあらわしてもいいだろう）手腕は、こうやって殺伐とした一〇年代を生きる、まともじゃない私をも確実に刺し貫く。

ますます気になる詩人である。

女教師に次々とバレーボールをぶつけられて、よろこんでいる夢をみました。(H)

カメラを掲げて夜中、新宿から小滝橋までうろうろ歩きました。(Y)

ひと降りきそうな空を眺めながら振り返ればいつだって鬼だ。ここは意外に、東京ではなく、山陰の山のなか。縊死死体がぶら下がっていてもおかしくないヒロシマの山のなか。おまえは何をしてきたのだ、ちゃーやじゃないがそんな声もひびきはするだろうよ(なあ、鈴木くん)。とにもかくにも本年度、最後の骨おり、刺激的な執筆者にもまたもや恵まれて、ただごとじゃない(かもしれない)まだ、やれるだろうよ。(あの娘はもういないけれど)、しかし、様々に助けられて骨おりも第六号、今年の頭から初めてやっと第六号、まだ第六号、とりあえず、ありがとうございます。色々とうございます。(K)

寒くなってきたし、そろそろ鍋が食べたいな  
と思い、金がないので蕎麦をおかずにパンを  
食べることにしかできない。(S)

# 編集後記



詩誌 骨おりダンスっ vol.06

編集長：鈴木 一平

編集委員：金子 鉄夫 + 萩野 亮 + 吉田 恭大

デザイン：三澤 水希

連絡先：[csnxd268@ybb.ne.jp](mailto:csnxd268@ybb.ne.jp) (鈴木)

発行日：2011年11月10日

撮影場所：新宿

撮影：吉田 恭大

次号：1月中旬 発行予定